仏教論理学派の一系譜

―プラジュニャーカラグプタとその後継者たち―

小野　基

0．はじめに

仏教論理学派は後期インド仏教哲学の主流をなす一大学派であり、その思想はインド仏教内部に留まらず、インド哲学一般、さらに後代のチベットの仏教哲学に多大な影響を与えた。この学派を事実上創始したのがディグナーガ（Dignāga, ca. 480-540）であり、また大成したのがダルマキールティ（Dharmakīrti, ca. 600-660）である。彼らの思想はその後、主としてダルマキールティの註釈者たちによって受け継がれ、この学派の活動はインドにおいて仏教哲学の伝統が途絶える13世紀初頭まで連綿と続いたことが知られている。しかし、ダルマキールティ以降約5世紀間に亘るこの学派の動静については、現在なお不明な点が少なくない。

とりわけ、プラジュニャーカラグプタ（Prajñākaragupta, 以下プラジュニャーカラと略記）を始祖とする、いわゆる宗教学派[1]と呼ばれる仏教論理学派の一学統に属する後期のダルマキールティ註釈者たちについては、彼らの残した註釈の浩瀚さの故もあってか、生存年代の確定や著作の性格分析などの基本的問題の検討がほとんど進んでいない[2]。プラジュニャーカラの著作に関しては既に多数の研究が存するが、彼の学統に属する他の思想家についての研究は極めて僅かである。しかしながら宗教学派は、ダルマキールティ註釈者の中で最も後代に位置し、彼らの思想はダルマキールティ解釈の一つの到達点を示すものであり、また先行する註釈者たち（文献学派・哲学学派）の見解を批判的に解釈し総合する立場にあったという意味でも、彼らの思想の研究は仏教論理学派の思想史の系統的理解のために不可欠であると言えよう。

そこで本稿では、プラジュニャーカラおよび彼の学統に連なる3人の註釈者、すなわちラヴィグプタ（Ravigupta）、ジャヤンタ（Jayanta＝Jina：この名称については後述）、およびヤマーリ（Yamāri）について若干の文献学的・基礎的考察を行い、従来不明な点の多いこの学統に関する研究の序説としたい。

1．プラジュニャーカラグプタ

プラジュニャーカラについては、その個別の思想に関して既に数多くの先行研究があるが、幾つかの基本的な点で再検討を要する問題が存すると思われる。本稿では、彼の主著の呼称・生存年代の2点に絞って、従来の定説を再検討してみたい。

1．1．主著の呼称について

はじめに、この学統の出発点となったプラジュニャーカラ作のダルマキールティの *Pramāṇavārttika*（以下 *PV* と略記）に対する大部の註釈の名称について若干検討しておく。このテクストに対しては、従来 *Pramāṇavārttikālaṃkāra* および *Pramāṇavārttikabhāṣya*

という２つの名称が研究者間で併用されている。しかしながら、このテクストのチベット訳名[3]および２つの複註のチベット訳名[4]は、いずれもこれが伝統的には*Pramāṇavārttikālaṃkāra*と呼ばれていたことを示唆している。後代のジュニャーナシュリーミトラ（Jñānaśrīmitra）、ラトナキールティ（Ratnakīrti）、ヤマーリらがプラジュニャーカラをしばしば「バーシュヤ作者（Bhāṣyakāra）」と呼ぶという事実は確かに認められるが[5]、プラジュニャーカラ自身はむしろ、主として「バーシュヤ作者」という名称を、論敵の一人であるミーマーンサー学派のシャバラスヴァーミン（Śabarasvāmin）に対して用いており[6]、自らの著作を*Bhāṣya*と呼んでいる形跡はない。

サンスクリット・テクストの末尾に位置するコロフォンでは、このテクストは*Pramāṇamahābhāṣyavārttikālaṃkāra*という長い名称で呼ばれている[7]。結局のところ、この長い正式名称を持つテクストに対して*Bhāṣya*および*Alaṃkāra*（ないし*Vārttikālaṃkāra*）という２通りの略称が伝統的に用いられていたとみるのが妥当であろう。しかし、*Pramāṇavārttikabhāṣya*という略称は、筆者の知るかぎり原典資料の中ではほとんど用いられることがないようである。それゆえ、たとえ略称ではあってもチベット訳名称に根拠を有し、後代のジャイナ教徒のしばしば用いる*Alaṃkāra*ないしは*Vārttikālaṃkāra*という呼称にも対応し[8]、またプラジュニャーカラを「アランカーラ学者」（rGyan mkhan po）と通称するチベット仏教の伝統にもよく合致する*Pramāṇavārttikālaṃkāra*という名称が、この著作の呼称として最も適わしいと考えられる。

１．２．プラジュニャーカラの生存年代

次にプラジュニャーカラの生存年代について考えてみたい。彼の著作と伝えられるものとしては、上述の主著*Pramāṇavārttikālaṃkāra*（以下*PVA*と略記）以外に、小品*Sahopalambhaniyamasiddhi*が晦渋なチベット訳で残されているが[9]、岩田孝氏が指摘しているように、この作品をプラジュニャーカラの真作とみなすことには無理がある[10]。従って、ここではプラジュニャーカラの著作を*PVA*に限定して考察を進める。

プラジュニャーカラの生存年代は、他の多くのインド仏教の思想家たちの場合と同様に、従来明確には決定できていない[11]。シュタインケルナー教授は「西暦800年頃」という説を表明しており[12]、これが現在の学界で広く承認されているように思われるが、教授は具体的な論証を行ってはいない。また他方で、彼の生存年代を８世紀初頭にまで遡らせる見解[13]や、その活動年代を９世紀中頃以降に措定する見解[14]も完全に否定されているわけではない。しかし、筆者はシュタインケルナー教授の年代設定はほぼ妥当であると考えている。以下ではその理由をやや詳細に説明することにしよう。

１．２．１．生存年代の上限―ダルモッタラとの関係

まずプラジュニャーカラの生存年代の上限（terminus post quem）に関しては、彼とダルモッタラ（Dharmottara）の関係が問題になる。それというのも、プラジュニャーカラの註釈者ヤマーリ（11世紀；年代については後述）が註釈の中でしばしばダルモッタラに言及し、プラジュニャーカラが引用・批判している学説の幾つかを、ダルモッタラの学説に比定しているからである。すなわちヤマーリの見解に従えば、プラジュニャーカラはダルモッタラ以降か、少なくとも同時代の人物であることになる[15]。

もっとも、この事実のみからダルモッタラとプラジュニャーカラの前後関係を結論づけることは早計であろう。ヤマーリが誤った伝承に依っている可能性を完全には排除できないからである。しかし、もしもヤマーリがダルモッタラ説とみなしている学説をダルモッタラの著作の中に同定することができ、しかもそれがダルモッタラ以前には見られない彼特有の学説であることを論証できれば、事実上プラジュニャーカラがダルモッタラの学説を（直接的であれ間接的であれ）引用しているとみて差し支えなく、従ってプラジュニャーカラはダルモッタラと同時代人、あるいは彼以降の人物であるとみなすことが許されるであろう。

以上のような観点からみて極めて重要な研究が、既に谷貞志氏・岩田孝氏によって発表されている。谷氏はヤマーリのダルモッタラへの言及を手がかりとして、プラジュニャーカラがダルモッタラ独自の帰謬論証（prasaṅgasādhana）の学説、及びそれと密接に関連するダルモッタラの無知覚因の学説である「能遍無知覚説」（vyāpakānupalabdhivāda）を批判している点を、一連の論文において詳細に論証している。[16] また岩田孝氏も独自の研究に基づいてプラジュニャーカラがダルモッタラの帰謬論証の学説を批判する論点を分析し、[17] またそれとは別にヤマーリがプラジュニャーカラによるダルモッタラ説の引用とみなしている3つの箇所を指摘し、*PVA* の叙述に対応すると見られるダルモッタラの叙述を同定している。[18] [19] これらの先行研究は、プラジュニャーカラがダルモッタラ学説を熟知していた可能性を強く示唆している。

しかしながら、他にも同様な事例が存在することを指摘できれば、この可能性はより一層高まるであろう。ところが実際にヤマーリの註釈には、以上に指摘された箇所以外に十数箇所にわたってプラジュニャーカラの叙述をダルモッタラ説と関連づけている箇所が見いだされる。しかもそれらの中の少なくとも4箇所の叙述については、ヤマーリの指摘するとおり、ダルモッタラ説の引用とみなすことが十分に可能であると思われる。

そこで、以下ではその4箇所について *PVA* における当該部分の原文と和訳を提示し、[20] またそれらをダルモッタラ説の引用とみなす根拠を簡略に示すことにしたい。[21]

(1) 真理論に関連して

PVA 29, 3-7: atha nānumānena prāmāṇyaṃ sādhyate, api tv arthakriyānubhavena, sa ca svasaṃvedanapratyakṣaprasiddhaḥ, tatra nārthakriyājñānaṃ pratyakṣaṃ sat pramāṇatāṃ pūrvasya gṛhṇāti, nāpi liṅgabhūtaṃ sad anumāpayati, pratyakṣeṇa prāmāṇyasya grahaṇābhāvāt, atītatvāc ca tadvyakteḥ. na hi vyaktiṃ vinā sāmānyaṃ mānatvaṃ pratyetuṃ śakyam, abhāvāt sāmānyasya. tasmāt pramāṇatāyāṃ saṃdehamātram. sa cārthakriyāsaṃbandhaḥ saṃdigdhaḥ. arthakriyānirbhāsāt tatra saṃdeho vyāvartata eva.

［和訳：（反論：）（ある認識の）真は推論によってではなく、目的実現の直接経験によって証明されるのであり、またこの直接経験は直接知覚である自己認識によって成立する。（しかし）その際、目的実現の認識は、直接知覚である限りは過去の（認識の）真を把握することはないし、また論証因である限りは（真を）推論せしめることはない。なぜならば、（過去の認識の）真が（後の）直接知覚によって把握されることはないし、またこの（目的実現の直接経験によって推論される）個物は過去のものだからである。およそ、個物な

しに普遍、つまり（ある認識の）真は知られない。普遍というものは非実在なのだから。従って、（ある認識の）真に関しては（認識の生起の時点では）一般に疑わしさがあり、目的実現との結合関係それ（自体）が疑わしい。この（真）に関する疑わしさは、目的実現が顕現することによって初めて排除される。]

この箇所はプラジュニャーカラが自らの真理論（prāmāṇyavāda）の学説を展開する際に提示する反対主張（pūrvapakṣa）である。ヤマーリはこの反対主張をダルモッタラの学説であるとみなしている。(22)

ここでは反論者は、「ある認識の真に関しては認識の生起の時点では一般に疑わしさがあり、その疑わしさは目的実現が顕現することによって初めて排除される」と自らの主張を総括しているが、その内容は、「認識の真理性とは目的実現（arthakriyā）の獲得可能性（prāpaṇaśakti）であり、当初の認識が生じる時点では真理性が確定されている必要はない」とするダルモッタラ特有の真理論の学説に一致している。(23)

さらにまた、この箇所とダルモッタラの著書 *Prāmāṇyaparīkṣā* の終結部分の一節との間には、文脈上の明らかな対応関係が認められる。(24) 従って、この反論者の主張はダルモッタラの学説と考えられる。

(2) 個別相の定義に関連して

PVA 247, 33ff.: indriyagocaro hy artho viśadapratibhāsaḥ, viprakṛṣṭe cārthe 'spaṣṭapratibhāsitā. na ca pratibhāsabhede 'py ekatā. atha dūrāsannatayā spaṣṭetarapratibhāsabhedasyaikaviṣayataiva jñānānāṃ katham pratibhāsabhedena bhedaḥ, arthakriyābhedena bhedāt.

[和訳：すなわち、感官の対象領域である実在は鮮明な顕現を伴い、また隔絶した実在には不鮮明な顕現がある。そして、顕現に区別がある場合には同一性は存在しない。（反論：）遠近によって認識には鮮明か否かという顕現の区別があるとしても、対象領域は唯一なのだから、顕現の区別によってどうして（対象に）区別があるだろうか。（対象の）区別は目的実現の区別によるのだから。]

この議論の文脈は現在の筆者には理解不能で和訳は試訳の域を出ないが、目下の検討課題にとって肝要なことは、ヤマーリがここで、「感官の対象である実在は鮮明な顕現を伴い、また隔絶した実在には不鮮明な顕現がある」という主張に対する、「遠近（dūrāsannatā）によって認識には鮮明か否かという顕現の区別がある」以下の反論を、ダルモッタラの学説とみている点である。(25)

この反論部分の言明については、実際にダルモッタラの著作 *Nyāyabinduṭīkā* の中に類似した表現を見いだすことができる。*Nyāyabindu* における個別相（svalakṣaṇa）の定義「それの近・非近によって認識の顕現に区別があるような対象が個別相である」(26) に対する註釈部分がそれである。その中でダルモッタラは、この定義の中の「近・非近」を、「『近』とは近い場所に位置することであり、『非近』とは遠い場所に位置することである。従って近・非近に基づき、認識の顕現つまり対象の形象は、鮮明か不鮮明かという区別をとる」(27) と説明しているが、この解釈は、「遠近（dūrāsannatā）によって認識には鮮明か否かという顕現の区別がある」という、ここでの反論部分の言明内容と一致している。

ここで「近」を「近い場所に位置すること」、「非近」を「遠い場所に位置すること」と

するのは極く一般的な解釈にみえるが、これがダルモッタラ固有の解釈であることは次の点から明らかである。すなわち、ダルモッタラに先行する *Nyāyabindu* 註釈者ヴィニータデーヴァ（Vinītadeva）は、この「近・非近」をダルモッタラとは全く別様に解釈していた。彼は「『近』とは（知覚）可能な場所（yogyadeśa）に位置することであり、『非近』とは不可能な場所（ayogyadeśa）に位置することである」[28]と説明していたのである（この説は上記引用中の前半部の主張に近い）。要するに、ここでのダルモッタラの解釈は旧来のヴィニータデーヴァの解釈に対して意識的に主張された新解釈なのである。従って、この解釈がダルモッタラに固有のものであることは明らかである。なお、*Nyāyabinduṭīkā* の複註作者である後代のマッラヴァーディン(Mallavādin)とドゥルヴェーカ・ミシュラ(Durvekamiśra)が、ここでのダルモッタラの解釈をヴェニータデーヴァの解釈に対する批判とみている点も参考になる[29]。

以上から、上記の引用文中の「遠近によって認識には鮮明か否かという顕現の区別がある」という言明は、ヤマーリの言うように、ダルモッタラ固有の解釈であると考えられる。

(3) 直接知覚の定義に関連して

PVA 252, 23: nanv abhrāntam ity evāstu, kim avikalpakatvena. na, paramatāpekṣatvād viśeṣaṇasya.

［和訳：（反論：）「錯乱がない」とだけ言うべきで、「概念作用がない」という（限定詞）は必要ない。（回答：）そうではない。限定詞は別の見解を顧慮したものだからである。］

この箇所は *Nyāyabindu* におけるダルマキールティの有名な直接知覚の定義「直接知覚とは概念作用を離れ、錯乱のないものである」[30]にかかわる議論である。反論者が「『概念作用がない』という限定詞は必要ない」と主張するのに対して、ここでの回答者は、限定詞は「別の見解（paramata）を顧慮したものだから」必要である、と答えている。ここでもヤマーリは、この回答者の言明をダルモッタラの解釈とみなしている[31]。

この言明についても、我々は実際にダルモッタラの *Nyāyabinduṭīkā* の中に対応する議論を見いだすことができる。ダルモッタラはそこで、「直接知覚の定義に2つの限定詞が必要なのは異なった見解（vipratipatti）を排除するためであって、推理を排除するためではない」と述べており[32]、その解釈は確かにここでの回答者の言明と対応している。

さらに重要であるのは、ここでダルモッタラが「推理を排除するためではない」と述べている点である。これは明らかに、ヴィニータデーヴァの「『概念作用を離れ』という限定詞は推理を排除するために必要」[33]との解釈を意識した言明である。このことから、「直接知覚の定義に2つの限定詞が必要なのは異なった見解を排除するためである」という解釈が、旧来のヴィニータデーヴァの解釈の否定の上に立脚したダルモッタラ固有の解釈であることが明らかとなる。なお(2)の場合と同様に、マッラヴァーディンとドゥルヴェーカ・ミシュラが、ここでのダルモッタラの解釈をヴェニータデーヴァの解釈に対する批判と位置づけている点も見逃せない[34]。

以上から、この引用文中の回答者の見解も、聊か表現は抽象的であるが、ダルモッタラ固有の解釈であるとみて差し支えなかろう。

(4) 認識の顕現の学説に関連して

PVA 350, 6: atha sthūlatā grahaṇadharmaḥ, varṇas tu grāhyadharmaḥ.

［和訳：（反論：）粗大なものは、認識するものの側の属性であり、他方、色彩は認識されるものの側の属性である。］

この一節は極めて簡略であるが、その主旨は以下のように理解される。すなわち、「我々の知覚は存在の最小単位である原子を直接は認識できず、それが集合した粗大なもの（sthūlatā）を認識する。その際、この粗大なもの、すなわち形態は、認識の内部の形象として顕現するものであって認識するものの側の属性であり、認識されるもの、すなわち原子の属性ではない。原子の属性であると言えるのは色彩である」と。ヤマーリによれば、この反論者の学説もまたダルモッタラに帰せられる。(35)

この説に関しては、ダルモッタラの *Prāmāṇyaparīkṣā* の中に対応する学説が見いだされる。ダルモッタラはそこで、「いわゆる形態（*saṃsthāna）は（認識の内部の）顕現の属性（*pratibhāsadharma）であるが、実在はそうではない」と主張している。(36) また、後代のモークシャーカラグプタ（Mokṣākaragupta）は、「粗大なものは顕現の属性である」とする説をダルモッタラに帰している。(37) 些か文脈は異なるが、これらの見解は、どちらもここでの反論者の言明と内容的に同一の主張である。従って、ここでの反論者の見解をダルモッタラの学説とみなすことは十分可能である。

以上の4箇所の検討から、(1)真理論、(2)個別相の定義、(3)直接知覚の定義、(4)認識の顕現に関する学説、の諸問題について、ダルモッタラに固有と認められる学説ないし解釈が *PVA* の中で言及されていることが判明した。(38) この検討結果と、ダルモッタラ固有の帰謬論証と無知覚の学説がプラジュニャーカラによって批判されているという従来の知見とを考え合わせるとき、プラジュニャーカラがダルモッタラの著作を知っていた可能性は極めて高いと結論づけることができるであろう。

もちろん、彼ら2人が同時代人であった可能性は依然として残るが、従来ダルモッタラの著作の中にプラジュニャーカラ独自の学説が見いだされたという報告がない以上、とりあえずダルモッタラがプラジュニャーカラに年代的に先行するとみてよかろう。

従って、プラジュニャーカラの生存年代の上限はダルモッタラの生存年代から決定できることとなる。ダルモッタラの生存年代については、従来フラウワルナー教授によって750—810年という年代が提案されていたが、(39) 近年ヘルムート・クラッサー氏は、インドの思想家には珍しくその絶対年代がほぼ確定できるシャーンタラクシタ（Śāntarakṣita）・カマラシーラ（Kamalaśīla）師弟の *Tattavasaṃgraha* 及び *Tattvasaṃgrahapañjikā* における真理論に係わる記述をダルモッタラの諸著作に現われる真理論と厳密に対比した結果に基づき、740—800年という信頼に価する新説を提示した。(40) この説を勘案することによって、我々はプラジュニャーカラの生存年代の上限を750年頃に措定し得る。

1．2．2．生存年代の下限

次に問題となるのは彼の生存年代の下限（terminus ante quem）であるが、これについてはジャイナ教の思想家ヴィドヤーナンダ（Vidyānanda）およびカシミール・ニヤーヤ学派の思想家バーサルヴァジュニャ（Bhāsarvajña）がプラジュニャーカラの *PVA* を頻繁に

引用すること[41]、また同じくカシミール・ニヤーヤ学派の思想家ジャヤンタ・バッタ(Jayanta Bhaṭṭa)が、*PVA* を引用するばかりでなく[42]、プラジュニャーカラの直弟子と考えられるラヴィグプタ[43]に言及していること[44]、が手がかりとなる。

このうちバーサルヴァジュニャは10世紀に活動したと考えられているので[45]、プラジュニャーカラの年代の上限とはかなり隔たってしまう。しかし、ジャヤンタ・バッタは9世紀後半（ca. 840-900）の人物と考えられているので[46]、彼に言及されるラヴィグプタはおそらくそれより以前に活動したことになり、従って彼の師であるプラジュニャーカラの年代の下限も、少なくとも9世紀中頃にまで遡らせることが可能であろう。

一方、彼の生存年代の下限の設定に当たっては、ジャイナ教の思想家ヴィドヤーナンダにも注目する必要がある。それというのも、*PVA* からの数多くの逐語的引用を含む *Aṣṭasahasrī* の著者である彼の生存年代は、後期ジャイナ教思想史の権威と目されるマヘーンドラ・クマールによれば、775—840年に措定されているからである[47]。仮にこのヴィドヤーナンダの生存年代が妥当であるとするならば、上限であるダルモッタラの生存年代（740—800）と相俟って、プラジュニャーカラの生存年代は、かなり狭い範囲に局限できることになろう。しかし、ヴィドヤーナンダの年代設定自体は、残念ながらその根拠が必ずしも明確とは言えず、慎重な取り扱いを要する。とは言え、少なくともこのヴィドヤーナンダの年代設定が、ジャヤンタ・バッタとラヴィグプタの年代から逆算された上述のプラジュニャーカラの年代の下限と矛盾しないことは確かである。

このように、プラジュニャーカラの生存年代の下限については、まだかなり多くの不確定要素があるが、いずれにせよ、彼の生存年代を9世紀後半以降にまで下らせることは、現在までに判明している諸事実だけからみても、かなり困難であると考えられる。

以上の検討から、おそらくプラジュニャーカラは、シュタインケルナー教授の推定通り、「西暦800年頃」、すなわち8世紀後半から9世紀前半の間の、ある時期に生存し活動した、と考えて間違いあるまい。本稿では作業仮説として、とりあえず750—810年という生存年代を提案しておきたいと思う[48]。

2．プラジュニャーカラの後継者たち

シチェルバツキー教授は、プラジュニャーカラの学統に属する、いわゆる宗教学派の仏教論理学者として、ラヴィグプタ、ジナ(後述のように正しくはジャヤンタ)、ヤマーリの3人を挙げている[49]。以下では、この3人の生存年代と、チベット訳にのみ残っている彼らの註釈書の基本性格について検討することにしよう。

2．1．ラヴィグプタとその註釈

はじめにラヴィグプタであるが、彼の註釈[50]は一部で誤解されているように[51]プラジュニャーカラの*PVA*に対するものではなく、あくまでダルマキールティの*PV*の第2章Pramāṇasiddhi章と第3章Pratyakṣa章に対する註釈であることを確認しておきたい。ただし、戸崎宏正氏が指摘しているように、この註は随所でプラジュニャーカラの註釈を逐語的に借用しており、*PVA* のダイジェスト版の様相を呈している[52]。その意味ではラヴィグプタ註は *PVA* と極めて近い関係にあると言え、またラヴィグプタをプラジュニャーカラの直弟子とする上述の記述も、歴史的事実とみて差し支えなかろう。

しかしながら彼には、単にプラジュニャーカラのエピゴーネンとして片づけてしまうことのできない要素もある。一例として、Pramāṇasiddhi 章冒頭の正しい認識の定義をめぐる議論では、彼はプラジュニャーカラの論じていない「偽」(aprāmāṇya) の問題を取り上げている。[53] この議論などは、注目に価するものと言えるであろう。

またプラジュニャーカラの註釈を祖述している箇所も、しばしば叙述順序や内容に微妙な相異があり、またチベット訳の翻訳者が異なるため、*PVA* とほとんど同一の内容がかなり異なった表現で叙述されている場合も少なくない。そのため、結果的にプラジュニャーカラの *PVA* の解読に際して、異なった視点からの情報を提供することになる。この意味では、ラヴィグプタ註は *PVA* の註釈ではないにもかかわらず、*PVA* の解読研究にとって重要な資料となり得る。また、発展的議論を多く含む *PVA* の叙述の文脈を正しく追跡するために、却って簡潔なラヴィグプタ註が役に立つという側面もある。

さらにラヴィグプタ註は、*PV* 本偈のほとんどを註釈中に引用しているが、そのチベット訳は、デーヴェーンドラブッディ (Devendrabuddhi) やプラジュニャーカラ等の他の註釈者の註釈の中に引用されている *PV* 本偈のチベット訳、あるいは別行本偈のチベット訳とはかなり異なった翻訳であり、[54] 多くの重要なヴァリアントを含んでいる。すなわちダルマキールティの *PV* 本偈のテクスト研究にも、ラヴィグプタ註の寄与するところは大きい。

なおラヴィグプタの生存年代については、上述のように下限がジャヤンタ・バッタの生存年代（9世紀後半）であることは確実であり、また上限がプラジュニャーカラの生存年代であることは言うまでもない。ここでは師のプラジュニャーカラの年代仮説に準じて、780—840年頃、という年代仮説を提案しておく。

2．2．ジャヤンタとその註釈

2．2．1．正しいサンスクリット名は「ジャヤンタ」

周知のように、プラジュニャーカラの *PVA* に対しては2つの複註がチベット訳に残されている。そのうち、より小部の註釈 *Pramāṇavārttikālaṃkāraṭīkā* の著者名は、チベット人によって rGyal ba can と翻訳されており、従来「ジナ」(Jina) というサンスクリット名に還元されるのが通例であった。[55] しかしながらこれは誤りであり、彼のサンスクリット名は正しくは「ジャヤンタ」(Jayanta) であったと考えられる。それというのも、*PVA* に対する今一人の註釈者であるヤマーリが、時折彼の註釈の中で「ジャヤンタ」(Dza yan ta) ないしそれに類似した音訳名の下に、実際に rGyal ba can の註釈の中にトレースできる叙述を引用し、時には批判を加えているからである。

そのような例は、ヤマーリの註釈の中に少なくとも6箇所見いだされる。それらの箇所では、ヤマーリによって「ジャヤンタ」ないしはそれに類似する音訳名で引用されている論者の見解が rGyal ba can 註の記述にほぼ逐語的に対応している事実が見てとれる。[56]

さらにまた、これらとは別にヤマーリは、Pramāṇasiddhi 章を *PV* の第1章とみなす特異な説を「ジャヤンタ」の学説として紹介し、詳細に批判しているが、[57] この学説も rGyal ba can の註釈が冒頭で論じる主張に全く合致している。[58]

以上から、rGyal ba can は「ジナ」ではなく、「ジャヤンタ」と還梵されるべきである。

２．２．２．ジャヤンタの生存年代

ジャヤンタの生存年代は正確にはわからない。しかし、上述の引用関係からヤマーリ以前であることは確実であり、また後述するようにジュニャーナシュリーミトラにも先行する可能性が高い。ジャヤンタの年代はおそらくラヴィグプタとジュニャーナシュリーミトラの中間、すなわち10世紀前半に措定するのが妥当であろう。

２．２．３．ジャヤンタ註の特徴

ジャヤンタ註はいろいろな意味で風変わりな註釈である。まず、全体量は後述するヤマーリ註と比較してかなり短いにもかかわらず、Pramāṇasiddhi 章だけに関して言えば、ヤマーリ註の約1.5倍ある。すなわちヤマーリが３つの章をほぼ均等な詳細さで註釈しているのに対し、ジャヤンタは Pramāṇasiddhi 章をとりわけ重視しているかのように見える。残りの章に対するジャヤンタ註は、*PVA* に対する註釈というより、むしろ *PV* に対する註釈であると言った方が適切と思えるほど、ダルマキールティの本偈の註釈に比重が傾いている。

ジャヤンタ註は、Pramāṇasiddhi 章だけについて見ても、全体的には逐語的註釈とは言えない。部分的には逐語的に註釈を進める箇所もあるが、しばしば長い傍論が展開され、説明される語句にも多くの場合片寄りがあるのが普通である。しかしながら、他の論書からの偈の引用を数多く含んでいる点では際立っている。その中の大部分は恐らくクマーリラ（Kumārila）からの引用であるが、*Ślokavārttika* からばかりではなく、散逸したクマーリラの大著 *Bṛhaṭṭīkā* からの引用をも相当数含む可能性が高く、この註釈から *Bṛhaṭṭīkā* の従来知られていない偈が回収されることが十分期待できる。(59)

さらに、同註の第２章・第３章に頻出する“rGyal ba can gyi'o”（「ジャヤンタのもの（＝解釈・見解）である」）という表現が興味を引く。この表現は少なくとも40箇所以上に現われているが、この表現を伴って現われる学説ないし解釈がジャヤンタ独自の見解であることを強調する役割を有しているように見える。(60) 実際、註(56)にチベット訳テクストを掲げたヤマーリの引用箇所(3)(4)(5)(6)に対応するジャヤンタ註の所説の末尾に、いずれもこの“rGyal ba can gyi'o”という表現が見いだされることには注意すべきである。この事実は、一般に“rGyal ba can gyi'o”という表現によって導入される所説が、ヤマーリがしばしばそれを引用し批判せねばならなかったような、ジャヤンタ固有の解釈・学説であることを示している。従って、この表現はジャヤンタ独自の解釈や思想を抽出しようとする場合に、重要なメルクマルとなると考えられる。

さらにまた、ジャヤンタ註には *PVA* を“'grel pa”と呼び、従ってその著者プラジュニャーカラを“'grel pa mdsad pa / byed pa”と呼んでいる箇所が多数存在する。特に、上記の“rGyal ba can gyi'o”という表現によって導入された見解が、幾つかの箇所で“'grel pa”の見解と並列的に言及されている点は注目に価する。(61)

なお、以上に述べたような特徴から、*PVA* に対する註釈としてのジャヤンタ註は、基本的には逐語的註釈としての有用性に欠ける点は否めない。しかし、チベット訳者がプラジュニャーカラの *PVA* 本文の訳者とは異なる上、本文引用箇所（pratīka）が現存する *PVA* のテクストと一致しない場合が多々あるため（恐らくジャヤンタが註釈を執筆する際に参照した *PVA* の原典が、現存する唯一の *PVA* の原典写本と多少系統を異にするものだった

ことによるのであろう)、*PVA* のテクスト批判に際して重要なヴァリアントを提供する資料となることを付言しておく。

2．3．ヤマーリ[62]とその註釈

上述のジャヤンタ註とは対照的に、ヤマーリ註では本文引用箇所の同定が極めて容易である。その最大の理由は、同註が *PVA* 本文と同一の翻訳者ゴク・ローデン・シェーラプ(rNgog Blo ldan shes rab) によってチベット訳されていることに因るが、ヤマーリが彼の註釈を執筆する際に用いた *PVA* 原典が、ジャヤンタが用いたものとは異なり、現存の *PVA* 原典写本と近い関係にあったことにも因るのかも知れない。

この註釈は逐語的かつ詳細であるため、難解な *PVA* 本文の解読に非常に有益である。プラジュニャーカラのテクストの解読に当たっては、ヤマーリ註は、彼の解釈に従うか否かは別として、必ず参照されなければならない文献であると言えよう。

2．3．1．ヤマーリの引用する思想家たち

以上のようにヤマーリ註は、何よりもまずプラジュニャーカラのテクスト解読にとっての有用性が特筆されるべきである。しかしまた同時に、引用・言及される仏教・非仏教の思想家の数が多いという意味でも非常に情報量の豊かな註釈であり、その資料的価値の高さも看過できない。

ディグナーガ、ダルマキールティ、プラジュニャーカラ、それに上述のダルモッタラ、ジャヤンタへの言及が随所にあることは今更言うまでもないが、それ以外に、従来確認できたものだけでも、仏教の思想家としては、ヴァスバンドゥ(Vasubandhu)、『ニヤーヤ・ムッカ』註釈者 (Nyāyamukhaṭīkākāra)、『プラマーナ・サムッチャヤ』註釈者 (Pramāṇasamuccayaṭīkākāra)、デーヴェーンドラブッディ、シャーキャブッディ (Śākyabuddhi)、アルチャタ (Arcaṭa)、シャーンタラクシタ、カマラシーラ、ラヴィグプタらの名前が[63]、またバラモン教の思想家としては、パタンジャリ(Patañjali)、アクシャパーダ (Akṣapāda)、シャバラスヴァーミン、バーラヴィ (*Bhāravi)、バルトリハリ (Bhartṛhari)、ウッディヨータカラ (Uddyotakara)、シャンカラスヴァーミン (Śaṅkarasvāmin)、クマーリラ、プラバーカラ (Prabhākara)、さらにトリローチャナ (Trilocana)らの名前が[64]、時にはテクストの引用をも伴って言及されている。またバーサルヴァジュニャの *Nyāyabhūṣaṇa* の引用らしきものも存する[65]。

しかしながら、この中でもヤマーリがアルチャタとダルモッタラに数多く言及するという点[66]は、仏教論理学派の思想史を考える上で殊のほか重要な事実であると思われる。なぜならば、この事実からは、仏教論理学史上の最後代に属する註釈者であるヤマーリが、プラジュニャーカラの仏教論理学史における立場をどのように認識していたのかがよく理解されるからである。すなわち、ヤマーリは明らかに、プラジュニャーカラがアルチャタ・ダルモッタラを中心とする、いわゆる哲学学派のダルマキールティ註釈者たちの流れを批判する立場として登場した、という点を強く意識して註釈を書いているのである[67]。

2．3．2．ヤマーリの生存年代

最後にヤマーリの生存年代であるが、彼に関してはジャヤンタの場合とは異なり、かな

り正確な年代設定が可能であるように思われる。まず下限は、ヤマーリ註の訳者であるローデン・シェーラプの絶対年代がチベット資料から確定できるため、容易に決定できる。すなわちローデン・シェーラプの生存年代は1059—1109年であるから[68]、遅くとも11世紀後半にはヤマーリ註は成立しておらねばならず、従って11世紀後半がヤマーリの生存年代の下限となる。

また上限としては、ジュニャーナシュリーミトラの活動年代（980—1030年[69]）を一応の目安とすることができるのではないだろうか。それというのもヤマーリの註釈の中に、ジュニャーナシュリーミトラが初めて用いたと推定される術語（例えばsarvasarvajñaとupayuktasarvajña）が見いだされるからである。一方、プラジュニャーカラの同じ叙述に対するジャヤンタの註釈部分には、これらの術語は見られない。このことは、ジャヤンタがジュニャーナシュリー以前の人物であるという前述の推定の一つの根拠となり得よう。

他にもマイトレーヤ（Maitreya）作とされる初期唯識論書を引用したり[70]、トリローチャナ、そしておそらくはバーサルヴァジュニャを引用するなど、ヤマーリとジュニャーナシュリーミトラの間には共通点が少なくない[71]。私見では、ジュニャーナシュリーミトラをヤマーリの師とする伝承[72]には、いくばくかの真実性が含まれているように感じられる。

以上の諸点から、ここでは作業仮説として、ヤマーリの生存年代を1000—1060年に措定しておきたい。

3．おわりに

本稿では、ダルマキールティ註釈者の一系譜である、プラジュニャーカラとその学統に属する人々とに関して、若干の基礎的考察を行った。とりわけ、プラジュニャーカラとヤマーリの生存年代、ジャヤンタのサンスクリット名称に関しては、従来の定説に新知見を付け加えることができたものと信じる。

しかしながら、註釈者間の関係等の問題に関してはまだ不明な点が多い。その一例はラヴィグプタ註とジャヤンタ註の関係、さらにジャヤンタ註とヤマーリ註の関係である。前者については、ジャヤンタはラヴィグプタを批判しているとする説があるが、筆者は今のところ明白な事実関係を確認するに至っていない[73]。またヤマーリがジャヤンタをしばしば批判していることは明らかであるが、彼がジャヤンタ註にかなり依存する場合があることも指摘されており、ヤマーリのジャヤンタに対するスタンスは決して単純なものではない。このような問題点を視野にいれつつ註釈文献を精査し、この学派の註釈者個々の思想的立場の解明にまで考察を深めてゆくことが、今後の課題となろう。

Abbreviation

D	Derge Editon
P	Peking Edition
WZKS(O)	Wiener Zeitschrift für die Kunde Süd- (Vols. 1-13: und Ost-) asiens, Wien.
J	Tshad ma rnam 'grel gyi rgyan gyi 'grel bshad [*Pramānavārttikālaṃkāraṭīkā] (Jayanta): P 5720, Vol. 133, Tshad ma, De 1b1-434a8; Ne 1b1-375a8.
JNA	Jñānaśrīmitranibandhāvaliḥ (Jñānaśrīmitra): Buddhist Philosophical Works of Jñānaśrīmitra. Ed. A. Thakur. Patna 1987.
T	Pramānavārttikālaṃkāra [tibetan] (Prajñākaragupta): P 5719, Vol. 132, Tshad ma, Te 1b1-382a7; The 1b1-344a6.
TBh	Tarkabhāṣā (Mokṣākaragupta): Tarkabhāṣā and Vādasthāna of Mokṣākaragupta and Jitāripāda. Ed. H. R. R. Iyengar. Mysore ²1952.
DhPr	Dharmottarapradīpaḥ (Durvekamiśra): ācārya=Dharmakīrti=kṛta=Nyāyabindor ācārya = Dharmottara = kṛta = ṭīkāyā anuṭīkārūpaḥ paṇḍita = Durvekamiśra = kṛto Dharmottarapradīpaḥ. Ed. D. Malvania. Patna ²1971.
NB	Nyāyabindu (Dharmakīrti): see DhPr.
NBṬ	Nyāyabinduṭīkā (Dharmottara): see DhPr.
NBṬṬ	Nyāyabinduṭīkāṭippaṇī. Tolkovanie na sočinenie Darmottary Nyāyabinduṭīkā. Ed. F. I. Ščerbatskoj. St.-Pétersbourg 1909.
NM	Nyāyamañjarī (Jayanta Bhaṭṭa): The Nyāyamañjarī of Jayanta Bhaṭṭa. Ed. S. N. Śukla. Benares City 1936.
NViVi	Nyāyaviniścayavivaraṇa (Śrī Vādirāja Sūri): Nyāya Viniścaya Vivaraṇa of Śrī Vādirāja Sūri, the commentary on Bhaṭṭākalaṃkadeva's Nyāya Viniścaya. Ed. Mahendra Kumar Jain. [2 Vols.] Kashi 1949, 1954.
PPar II	[Laghu-] Prāmāṇyaparīkṣā (Dharmottara): H. Krasser, Dharmottaras kurze Untersuchung der Gültigkeit einer Erkenntnis - Laghuprāmāṇyaparīkṣā. Teil I. Wien 1991.
PVA	Pramāṇavārttikālaṃkāra (Prajñākaragupta): Pramāṇavārtikabhāṣyam (Vārtikālaṃkāra) Prajñākaraguptena viracitam. Ed. Rāhula Sāṃkṛtyāyana. Patna 1953.
PVinṬ	Pramāṇaviniścayaṭīkā (Dharmottara) : Dharmottaras Exkurs zur Definition gültiger Erkenntnis im Pramāṇaviniścaya. Tibetischer Text, Sanskritmaterialien und Übersetzung von E. Steinkellner u. H. Krasser. Wien 1989.
PVV(R)	Tshad ma rnam 'grel gyi 'grel pa zhes bya ba [*Pramāṇavārttikavṛtti nāma] (Ravigupta): P 5726, Vol. 136, Tshad ma, Tshe 137a8-266a6.
Y	Tshad ma rnam 'grel gyi rgyan gyi 'grel bshad shin tu yongs su dag pa zhes bya ba [*Pramāṇavārttikālaṃkāraṭīkā suparišuddhi nāma] (Yamāri): P 5723, Vol. 134-136, Tshad ma, Phe 208a7-345a8: Be 1b1-290a7; Me 1b1-436a-; Tse 1b1-321a5.
RNA	Ratnakīrtinibandhāvaliḥ (Ratnakīrti): Buddhist Nyāya Works of Ratnakīrti. Ed. A. Thakur. Patna ²1975.
SVṬ	Siddhiviniścayaṭīkā (Anantavīryācārya): Śrīmad=Bhaṭṭākalaṃkadeva=praṇītasya savṛtti = Siddhiviniścayasya Ravibhadrapādopajīvi = Anantavīryācārya = virācitā Siddhiviniścayaṭīkā. Ed. Mahendra Kumar Jain [2Vols.] Benares 1959.

(1) ロシアの碩学シチェルバツキーがダルマキールティの註釈者を文献学派・哲学学派・宗教学派の3系統に分類した（cf. Th. Stcherbatsky, *Buddhist Logic*, St. Petersburg, Vol. 1, 1932: 39ff.）。本稿ではさしあたり彼の3学派の分類と名称に従うが、その妥当性は現代のインド仏教思想史研究の観点から十分再吟味される必要がある。Cf. M. Ono, "A Reconsideration of the controversy about the Order of the Chapters of the *Pramāṇavārttika* - the argument by Indian Commentators of Dharmakīrti" in *Proceedings of the 7th. Seminar of the International Association for Tibetan Studies*. Wien (in print).

(2) 他方、8世紀以前の比較的初期のダルマキールティ註釈者については、最近注目すべき年代論が試みられた。Cf. 船山徹「8世紀ナーランダー出身注釈家覚え書き—仏教知識論の系譜—」『日本佛教學會年報』第六十號、日本佛教學會、1995：49-60。

(3) Cf. T(Te) 1b1f.: rgya gar skad du / Pra mā ṇa barti kā laṃkā ra / bod skad du / Tshad ma rnam 'grel gyi rgyan /

(4) Cf. rGyal ba can: Tshad ma rnam 'grel gyi rgyan gyi 'grel bshad (*Pramāṇavārttikālaṃkāraṭīkā) (Peking Nr. 5720; Derge Nr. 4222) ; Yamāri: Tshad ma rnam 'grel gyi rgyan gyi 'grel bshad shin tu yongs su dag pa shes bya ba (*Pramāṇavārttikālaṃkāraṭīkā suparišuddhī nāma) (Peking Nr. 5723; Derge Nr. 4226)

(5) Cf. JNA 154, 24; 227, 18; 365, 10; 367, 6; 398, 5; 414, 13 (Bhāṣyakṛt); 461, 14; 462, 17; 506, 8; 509, 13; 512, 9; 552, 16; RNA 31, 22; 137, 8; 147, 29; 149, 15; Y(Phe) 341b2; (Be) 82a6; (Tse) 94b2 etc.: bshad pa byed/mdzad pa. しかしラトナキールティは"Alaṃkārakāra"という名称も用いる（cf. RNA 47, 31; 140, 11）。モークシャーカラグプタも同様である（cf. TBh 17, 1; 18, 14; 63, 20; 70, 9）。

(6) Cf. PVA 479, 10; 590, 24. なお、PVA 510, 18では"*Bhāṣya*"は *Nyāyabhāṣya* を意味している。

(7) Cf. PVA 648, 18; T(The) 343a5: Tshad ma'i bshad pa'i chen po rnam 'grel gyi rgyan.

(8) 一例として *Nyāyaviniścayavivaraṇa* において *Alaṃkāra* ないしは *Vārttikālaṃkāra* という呼称が用いられている箇所をリストアップしておく。Cf. NViVi I 19, 14; 117, 12f.; 175, 20; 177, 4; 185, 12; 430, 23; II 146, 17; 21; 161, 23; 175, 16; 262, 18; 268, 28; 342, 27.

(9) Lhan cig dmigs pa nges par grub pa zhes bya ba : Peking Nr. 5753; Derge Nr. 4255.

(10) Cf. T. Iwata, *Sahopalambhaniyama*, Stuttgart 1991: Vol. I, 255f.

(11) チベットにはプラジュニャーカラの伝記が幾つか伝えられている。しかしその記述が生存年代を含む彼の歴史的実像の解明に役立つとは考えにくい。なお、伝記については次の諸文献を参照。Cf. S. Ch. Vidyabhusana, *A History of Indian Logic*. Calcutta 1921: 336; 宮坂宥勝「ダルマキールティの生涯と作品(2)」『密教文化』第94号、1971: 83-80; L. W. J. van der Kuijp, *Contributions to the development of Tibetan Buddhist Epistemology*. Wiesbaden 1983: 257f.

(12) Cf. E. Steinkellner, "Philological Remarks on Śākyamati's Pramāṇavārttikaṭīkā", in *Studien zum Jainismus und Buddhismus. Gedenkschrift für L. Alsdorf*. Wiesbaden 1981 : 283.

(13) *PVA* 原典写本の発見者・校訂者であるサーンクリトヤーヤナは、プラジュニャーカラを西暦700年前後の人と見ている（cf. PVA: introduction）。また義浄の『南海帰寄内法伝』に登場する正量部の思想家「慧護」（*Prajñāgupta）「『大正新修大蔵経』第54巻、229b）を我々のプラジュニャーカラと同一視する場合には、彼の生存年代を8世紀初頭にまで遡らせる必要が生じる（cf. SVṬ: introduction 43）。しかしPrajñāgupta という名前はチベット大蔵経所収のタントラの訳者名としても現われ、珍しいものではない。「慧護」をプラジュニャーカラと同一視せねばならぬ積極的理由はない。

(14) Cf. Stcherbatsky 1932: 43; Kuijp 1983: 2.

(15) ヤマーリがダルモッタラの大著 *Pramāṇaviniścayaṭīkā* に複註を書いた可能性を示唆するチベット人の記述が、最近カイプ氏によって指摘された（cf. L. W. J. van der Kuijp, "On Some Early Tibetan *Pramāṇavāda* Texts of the China Nationalities Library of the Cultural Palace of Nationalities in Beijing", *Journal of Buddhist and Tibetan Studies* 1: 25）。そのチベット人の記述の真偽の程はともか

く、ヤマーリがダルモッタラの学説を熟知していたことは確実である。

(16) Cf. 谷貞志「プラサンガ・サーダナ（帰謬論証）導入による論理系の構造変換ーダルモッタラとプラジュニャーカラグプタの解釈の差異ー」『仏教学』第15号、1983：(1)-(27)："A Conflict between Logical Indicators in the Negative Inference (Svabhāvānupalabdhivādin versus Vyāpakānupalabdhivādin)", 『印度学仏教学研究』第32巻第2号、1984：1106-1110；T. Tani, "Logic and Time-ness in Dharmakīrti's Philosophy - Hypothetical Negative Reasoning (prasaṅga) and Momentary Existence (kṣaṇikatva)", in *Proceeings of the 2nd International Dharmakīrti Conference*. Ed. E. Steinkellner. Wien 1991: 325-401. なお、この2つの問題に関するヤマーリのダルモッタラへの言及と、*PVA* における関連箇所は次の通り：Y(Tse)29b5; PVA 481, 21; Y(Tse)32a7: PVA 482, 31; Y(Tse)33b5: PVA 483, 23; Y(Tse)300a2: PVA 637, 32; Y(Tse)301b4: 301b7: PVA 638, 261.

(17) Cf. T. Iwata,. *Prasaṅga und Prasaṅgaviparyaya bei Dharmakīrti und seinen Kommentatoren*. Wien 1993: 63ff.

(18) Cf. 岩田孝「Prajñākaragupta(PVBh)に於ける有形相知識説に関する一考察」, *Saṃbhāṣā*, Vol. 5, 1983: 66; Iwata 1991: Vol. II, 122. 3つの箇所とは以下の通り。Y(Me)173a6f.: PVA 229, 8ff.; Y(Me)176b5: PVA 231, 3ff.; Y(Me)337b1f.: PVA 345, 91. なお第一の箇所については、現存する *PVA* の完全写本のコピイストであるダーナシーラが、写本のマージンに興味深いコメントを書き残している。すなわち彼はヤマーリと同様、この箇所がダルモッタラに帰せられると記している（cf. PVA 229, note 1-2)。

(19) シュタインケルナー教授も、プラジュニャーカラがダルモッタラの*Paralokasiddhi*に登場する学説を批判している事実を指摘しているが、彼は両者の年代的な前後関係については判断を避けている。Cf. E. Steinkellner, *Dharmottaras Paralokasiddhi*, Wien 1986: 8; 38; 50.

(20) テクストには若干の校訂箇所を含むが、ここでは煩を厭い一々注記しない。

(21) 以下では(1)を除いては *PVA* における議論の文脈をとりあえず度外視して考察を進める。プラジュニャーカラが実際にダルモッタル説を熟知していたか否かを正確に判断するためには *PVA* の議論の文脈を検討することが必要となるが、今回はそれを果たすことはできなかった。今後の課題としたい。

(22) Cf. Y(Phe)338a5f.: Chos mchog gyi phyogs mi rigs par bstan nas sngar bshad pa nyid mjug sdud pa ni des na zhes bya ste / ji skad du bshad pa'i tha snyad kyis rnam par bzhag pa yin gyi (D: gyis P) / de (D: do P) kho na nyid du ni ma yin no zhes bya ba 'i don to //

(23) プラジュニャーカラに至る仏教論理学派における真理論をめぐる思想史は、次の論文において簡単にスケッチし、その際ダルモッタラの真理論、及びプラジュニャーカラによるダルモッタラ説批判の論点に言及した。Cf. 小野基「プラジュニャーカラグプタによるダルマキールティのプラマーナの定義の批判について ープラジュニャーカラの真理論ー」『印度學仏教學研究』、第42巻第2号、1994：878-885.

(24) Cf. PPar II (51), 5-13: gang gi tshe tshad ma la the tshom za ba de'i tshe 'jug pa dang phan tshun rten pa'i nyes par mi 'gyur ram 〈/〉 zhugs pa las don bya ba thob pa'i phyir tshad mar nyes pa las 'jug pa'i phyir phan tshun rten pa [ma] yin no zhe na / gang gi phyir tshad ma la the tshom yod kyang don du gnyer ba snang ba'i rang bzhin la snang ba dang ldan pa'i tshad ma las rab tu 'jug pa de'i phyir phan tshun rten pa'i nyes pa yod pa ma yin no // don la the tshom yod pa las kyang rtog pa dang ldan pa 'jug pa'i phyir don la the tshom za ba las ldog par ji ltar 'gyur / ; H. Krasser, *Dharmottaras kurze Untersuchung der Gültigkeit einer Erkenntnis Laghuprāmāṇyaparīkṣā*, Teil 2, Wien 1991: 114-116, note 288; PVinṬ (20),18-(21),1; E. Steinkellner/H. Krasser, *Dharmottaras Exkurs zur Definition gültiger Erkenntnis im Pramāṇaviniścaya*, Wien 1989: 91.

(25) Cf. Y(Me)214a4: 'dir slob dpon Chos mchog gi lugs kyis dogs pa ni gal te zhes bya ba 'o //

(26) Cf. NB 1, 13: yasyārthasya saṃnidhānāsaṃnidhānābhyāṃ jñānapratibhāsabhedas tat svalakṣaṇam.

(27) Cf. NBṬ 74, 3-5: saṃnidhānaṃ nikaṭadeśāvasthānam. asaṃnidhānaṃ dūradeśāvasthānam.

tasmāt saṃnidhānād asaṃnidhānāc ca jñānapratibhāsasya grāhyākārasya bhedasphuṭatvāsphuṭatvābhyām.

(28) Cf. NBṬ[V] 8b5: nye ba ni yul rung ba na 'dug pa'o // mi nye ba ni yul rung ba ma yin pa na 'dug pa dang /

(29) Cf. NBṬṬ 36, 9f.: **asaṃnidhānaṃ dūradeśāvashānam** iti bruvatā Vinītadevasya vyākhyā dūṣitā; DhPr 74, 16ff.: sannidhānāsannidhānaśabdau nikaṭadūrāvasthānārthau vyācakṣāṇo yad anyair ākhyātam: asannidhānaṃ yogyadeśe sarvathā vastuno 'bhāvaḥ, iti tad apākaroti.

(30) Cf. NB 1, 4: tatra pratyakṣaṃ kalpanāpoḍham abhrāntam.

(31) Cf. Y(Me)219a7: slob dpon Chos mchog gi (: gis P) lugs kyis grub pa'i mtha' gsungs ba ni ma yin te zhes bya ba 'o //

(32) Cf. NBṬ 44, 1f.: etac ca lakṣaṇadvayaṃ vipratipattinirāsārtham, na tv anumānanivṛttyartham.

(33) Cf. NBṬ[V] 5a7: rtog pa dang bral ba smos pa ni rjes su dpag pa bsal bar bya ba'i phyir ro //

(34) Cf. NBṬṬ 18, 13f.: **etac ca lakṣaṇadvayam** ityādinā padadvayena vipratipattinirāsaṃ darśayatā Vinītadevavyākhyā padadvayavyavacchedakathanarūpā dūṣitā; DhPr 44, 4ff: ihābhrāntapadaṃ taimirikādijñānavyavacchedārtham, kalpanāpoḍhaṃ tu **anumānanirāsārtham** iti yat pūrvakair vyākhyātaṃ tad vyaktam evāpahastayann āha: **etac ca** iti.

(35) Cf. Y(Me)340b7f.: 'dir slob dpon Chos mchog gi lugs dogs par byed pa ni / **ci ste** zhes bya ba 'o //

(36) Cf. PPar II (33), 13ff.: chen po la chung ngur nges pa zhes brjod pa gang yin pa de la yang dbyibs zhes bya ba ni snang ba 'i chos yin gyi dngos po ni ma yin no zhes brjod do //; Krasser 1991: 80; note 165.

(37) Cf. TBh 66, 19: pratibhāsadharmaḥ sthaulyam ity uktaṃ Dharmottareṇa.

(38) ここで論じた箇所以外でもヤマーリは随所でダルモッタラの名前に言及している。それらの中には *PVA* の叙述とは直接関連しないものもある(cf. Y(Phe)210b8f.(= NBṬ 7,3ff.); Y(Phe)212b1f.(= NBṬ 5,1); Y(Phe)215a2; Y(Phe)222a8; Y(Phe)231a1)。しかし、ここで論じた 4 つの箇所と同様に *PVA* の叙述に直接関連し、従ってダルモッタラとプラジュニャーカラの関係を考えるに当たって検討を要すると思われる箇所も幾つかある (cf. Y(Be)83a8 ad PVA 69, 25; Y(Me)50al ad PVA 178, 19; Y(Me)185a3 ad PVA 235, 1; Y(Me)347b7 ad PVA 356, 23; Y(Me)350b6 ad PVA 358, 25.; Y(Tse)261b2 ad PVA 615, 15)。ただし、これらの箇所については筆者は今のところ対応するダルモッタラ学説を同定できていない。

(39) Cf. E. Frauwallner, "Landmarks in the History of Indian Logic", *WZKSO* 5, 1961: 125-148.

(40) Cf. H. Krasser, "On the Relationship between Dharmottara, Śāntarakṣita and Kamalaśīla" in *Tibetan Studies, Proceedingns of the 5th Seminar of the International Association for Tibetan Studies.* Narita 1989. Vol. 1 - *Buddhist Philosophy and Literature.* Ed. I. Shoren and Y. Zuiho. Naritasan Shinshoji, 151-158.

(41) ヴィドヤーナンダによるプラジュニャーカラの叙述の引用は、次の著作に指摘されている。Cf. *Prakaraṇa Pañcikā of Sri Śālikanātha Miśra with Nyāyasiddhi*, Ed. A. S. Sastri. Benares 1961: introduction; 神子上恵生「プラジュニャーカラグプタのニヨーガ説批判」『龍谷大学論集』第396号、1971：42-62；また *Nyāyabhūṣaṇa* における *PVA* の引用の多くは、次の論文に回収されている。Cf. 渡辺重朗「『量評釈荘厳』における量の定義」『成田山仏教研究所紀要』第1号、1976：367-400.

(42) Cf. E. Steinkellner/ M. T. Much, *Texte der erkenntnistheoretischen Schule des Buddhismus*, Göttingen 1995: 74.

(43) Cf. 戸崎宏正『仏教認識論の研究』上巻、東京、1979：31；PVV(R)266a5f.: bla ma dam pa / dge ba'i bshes gnyen Shes rab 'byung gnas kyi zhabs la btud de bsten nas Nyi ma sbas pas sbyar ba /

(44) Cf. NM II, 34, 19.

(45) Cf. G. Oberhammer, "Bhāsarvajñas Lehre von der Offenbarung", *WZKS* 18, 131-182; E. Prets,

Der Beweis bei Bhāsarvajña, Wien 1992 (Dissertation): 24.

(46) Cf. Steinkellner/Much 1995: op. cit.; A. Wezler, "Zur Identität der "Ācāryāḥ" und "Vyākhyātāraḥ" in Jayantabhaṭṭas Nyāyamañjarī", *WZKS* 21, 1975: 135.

(47) Cf. SVṬ: introduction 49f.

(48) なお、この年代仮説を裏付ける可能性のある興味深い記述が *PVA* 本文中に見られる。それは都市カニャークブジャ (kanyākubja = kanauj) に関する記述である。カニャークブジャはガンジス川中流域に位置し古代から繁栄を誇った北インドの著名な大都市であり「曲女城」の名で漢訳文献にも登場する。プラジュニャーカラはその大部の著書の中で少なくとも4度にわたってこの都市に言及している。しかし奇妙なことに、彼はこの都市を「死者のように、記憶されてはいるが知覚されることがないもの」の例として引き合いに出しているのである(cf. PVA 18, 19; 90, 2; 390, 33; 591, 27. 特に次の一文。PVA 591, 27: na hi smaryamāṇe 'rthe pravartanam akṣānām, anyathā kānyakubjādīnām api pratyakṣatā bhavet. tato mṛtānām api pratyakṣatāprasaṅgaḥ.[和訳：すなわち、記憶されている対象に関しては知覚は機能しない。そうでなければ、カニャークブジャ等も知覚されるものであることになってしまう。従って、死者たちも知覚されることになってしまう。])。

この記述に関する一つの解釈として、プラジュニャーカラが *PVA* を述作した時期に都市カニャークブジャが何らかの理由でかつての繁栄を失い極度に衰退していたためにこの譬喩が成立した、と想像することは決して不自然ではなかろう（ここでは都市カニャークブジャが「死者」と同列に論じられていることに注目すべきである。著者がカニャークブジャから遠く離れた場所にいるために知覚できないという解釈では、この譬喩は十分に理解できない)。そこでインド史の研究を参照すると、カニャークブジャは、少なくとも8世紀中頃まではヤショーヴァルマン王（Yaśovarman, 725[t.a.q.]-752[t.a.q.]）の治世下に繁栄を誇っており、また9世紀初頭以降はプラティハーラ（Pratihāra）朝の首都として再び重要な位置を占めたのに対し、8世紀後半には鼎立する3大国の狭間にあって度々の戦火を被っていたらしいことが判明する（cf. V. A. Smith, "The History of The City of Kanauj and King Yaśovarman", *Journal of the Royal Asiatic Society* 2, 1908: 765-793; A. L. Basham ed., *A Cultural History of India*, Oxford 1975: 52f.)。

すなわち、もしもプラジュニャーカラが8世紀後半に著作活動していたとするならば、彼のカニャークブジャに関する奇妙な記述には一応納得のゆく説明を与えうるのに対して、彼の生存年代を8世紀前半以前に遡らせるか9世紀初頭以降にまで下らせる際には、この記述に対して何らかの別様の解釈が必要となる。以上の点は、8－9世紀の北インドの歴史その他に関するさらに詳細な検討を要するが、プラジュニャーカラの活躍年代の中心を8世紀後半に措定する際の傍証となりうるかも知れない。同時期の文学作品にカニャークブジャに関する同様な譬喩が現われる可能性もあろう。検討課題としたい。他方、ジュニャーナシュリーミトラ（活躍年代　ca. 980-1030）の著作にも、カニャークブジャを用いた譬喩が登場するが、そこでは単に空間的隔たりが問題になっているように思われる（cf. JNA 135, 13f.: na hi yo yadā nāsti sa tadopalabhyaḥ. anyathā kanyākubjasthito 'pi pātaliputre dṛśyeta.)。検討を要する。

(49) Cf. Stcherbatsky 1932: 44f.

(50) Tshad ma rnam 'grel gyi 'grel pa zhes bya ba (Peking No. 5726; Derge No. 4224); Tshad ma rnam 'grel gyi 'grel pa las le'u gsum pa (Peking No. 5722; Derge No. 4225).

(51) Cf. Stcherbatsky 1932: 47.

(52) Cf. 戸崎、前掲書：31.

(53) Cf. PVV(R)145b4ff.

(54) ラヴィグプタ註所収の *PV* 本偈のチベット訳の問題をめぐって、最近注目すべき研究が発表された。Cf. E. Franco, "A Pre-canonical Translation of Dharmakīrti's Pramāṇavārttika and Development of Translation Techniques from Sanskrit to Tibetan", in *Proceedings of the 7th. Seminar of the International Association for Tibetan Studies*. Wien (in print).

(55) Cf. 『西蔵大蔵経総目録　東北帝国大学蔵版』、東京　1970：No. 4222；『影印北京版西蔵大蔵経総目

録』、東京・京都　1961：No. 5720.

(56)　少々長くなるが、一人の思想家の正式名称の確定という問題の重要性に鑑み、以下にヤマーリの引用する「ジャヤンタ」説の箇所のチベット語訳原文と、それに対応すると考えられる rGyal ba can 註の記述を掲載しておく。

(1)　Y(Phe)215a3ff.: gang yang Dzā yan ta na re / 'di ni 'chad par 'gyur ba'i bstan bcom mtha' dag gi don dam bca' ba yin la / de yang gzhan don gyi rjes dpag yin pa'i phyir / sgra mi rtag ste zhes bya ba la sogs pa gzhan du tshad ma yin no // dam bca ba yang rjes su dpag pa'i yul nye bar ston pa'i phyir / rjes su dpag pa nyid do 'o na ji ltar bkag ce na / khyab pa brjod pa can gyi gtan tshigs la mi mkho ba'i phyir ro zhes zer ro //

= J(De)9b6ff.: 'chad par 'gyur ba'i bstan bcos ma lus pa'i don du dam bcas pa yin la / de rnams kyang gzhan gyi don gyi rjes su dpag pa yin pa'i phyir sgra mi rtag ste zhes bya ba la sogs pa dang 'dra bar tshad ma yin te / rjes su dpag pa'i yul bstan par dam bcas pa'i phyir rjes su dpag pa nyid yin pa de lta na ci'i phyir dgag / smras pa khyab par byed pa'i gtan tshigs la mi dgos pa'i phyir zhes 'chad par 'gyur ba'o //

(2)　Y(Tse)50a2f.: phyir rgol ba la bltos nas ni 'bras bu med par 'gyur te / grub pa la bsgrub pa'i phyir ro zhes bya ba ni Dza yan ta 'i bshad pa 'o /

= J(Ne)279b7: 'bras med ni phyir rgol ba ste grub pa la bsgrub pa'i phyir ro //

(3)　Y(Tse)88b5f.: byas pa ste 'jig rten pa rnams dang / ma byas pa 'jig rten pa ma yin pa ste skyes bus ma byas pa'i phyir ro zhes bya ba ni Dza yan ta'i bshad pa'o // brda byas pa dang gzhan dag ces bya ba ni 'Grel pa mkhan gyi'o //

= J(Ne)298b3f.: byas pa dang zhen bya ba ni 'jig rten pa'i rnams so // ma byas pa rnams ni skyes bus ma byas pa'i phyir ro zhes bya ba ni rGyal ba can gyi 'o / byas pa ste brdar byas pa rnams dang gzhan rnams so zhes bya ba ni 'grel pa'i 'o //

(4)　Y(Tse) 103b8ff., Dza yan tas kyang bshad pa gzhan byas pa ni / gal te bum ba la sogs pa 'ga' zhig la zla ba ma yin pa nyid dngos po'i stobs kyis zla ba nyid bston / pa de la grub na / de'i tshe zla ba nyid de yang ri bong can la de kho na bzhin 'grub par 'gyur ro // ci'i phyir zhe na / bum pa la sogs pa la / grags pas grub pa'i zla ba ma yin pa nyid khas len na / ri bong can la zla ba nyid bzlog pa med pa'i phyir te / rigs pa mtshungs pa'i phyir ro zhes so //

= J(Ne)303b4ff.: la lar zhes bya ba ni bum pa la sogs pa'o // dngos stobs las yin zhes bya ba ni de yang ri bong can la zla ba nyid de nyid du 'grub par 'gyur ro // ci las she na / grags pas grub pa zhes bya ba ste / grags pas grub pa zla ba nyid ma yin pa bum pa la sogs pa khas len na ri bong can ma yin pa zla ba nyid ma bkag pa'i phyir te / rigs pa la khyad par med pa'i phyir zhes bya ba ni rGyal ba can gyi 'o //

(5)　Y(Tse)150b8ff.: mi rtag gtan tshigs dang ldan pas zhes bya ba'i // rnam 'grel gyi don Dza (:Dzi) yan tas bshad pa ni / gal te sgra nyid la mi rtag pa nyid dang / des kyang gtan tshigs dang ldan par brjod par byed na / de'i tshe de ltar te thams cad mi rtag pa yin pa'i phyir zhes bya bas phyogs de bsal bar 'gyur ro zhes bya ba'o //

= J(Ne)315a4f.: thams cad mi rtag pa'i phyir zhes bya bas de ni de ltar bzlog par 'gyur te / gal te sgra nyid mi rtag pa nyid yin pa des ni gtan tshigs dang ldan pa nyid du brjod par byed na zhes bya ba ni rGyal ba can gyi 'o //

(6)　Y(Tse)170b3ff.: Dza yan tas ni rnam pa gzhan du 'chad de / gal te kun rdzob tu tha dad par khas len na de'i chos la sogs pa'i tha dad pa dngos po thams cad la ma grub par ci ltar brjod / kun rdzob tu grub pa gang yin pa de yang don dam par grub pa kho na yin no snyam du dogs na don dam pa rnam par dpyad na ni / rigs la sogs pa gsal ba dang de nyid de / de'i bdag nyid dper ba lang khra

mo yin no // zhes bya ba dang / gzhan nyid de rigs la sogs pa gsal ba la tha dad pa / dper ni 'di'i ba lang nyid ces bya ba de nyid dang gzhan nyid 'gog par 'gyur ro // gtan tshigs gang gis 'gog snyam na / mngon sum gyis de lta bur gyur pa ma grub pa'i phyir ro // yul gang la gnas nas 'gog snyam na / kun rdzob pa'i dngos rnams la ste rtog pa'i bag chags las byung ba rnams la'o zhes so //

= J(Ne)319b3ff.: gal te kun rdzob tu rnam par dbye ba yod na dngos po thams cad la chos la sogs pa'i dbye ba ji ltar ma grub pa yin zhes zer ba la / don dam par ni zhes bya ba'o // de nyid ces bya ba ni gcig nyid de gsal bas rigs la sogs pa ste ba lang ngo zhes bya ba'o // gzhan nyid ni ba lang nyid ces nyid ces bya ba ste 'gog par 'gyur zhes bya bar sbyar ro // ci las zhe na mngon sum las de ma grub pa'i phyir ro // de 'brel pa nyid du gang du gnas pa yin zhe na / kun rdzob pa'i rnams la'o // rnam par rtog pa 'i bag chags kyi rtog pa las de ltar rtogs pa ni rGyal ba can gyi 'o //

(57) Cf. Y(Phe)215b7-216a2; 217a5; 236a6; PVSV Introduction xv, note 1.

(58) Cf. J(De)2b3-5b3. 詳細は注(1)に示した拙稿を参照。

(59) 一例として、Pramāṇasiddhi 章の冒頭部分の真理論に関する議論で引用される諸偈が指摘できる。これらの偈についての詳細な検討は、近く別稿で行う予定である。

(60) 後代の付加ではないとするならば、これはインドの哲学論書としてはあまり類例のない珍しい自己表現であるといえるのではないだろうか。

(61) Cf. J(Ne)233a4-b6; 255b1-4; 300b5-7; 308b7; 319b6-320a1. これらの箇所では、ジャヤンタはプラジュニャーカラのダルマキールティ解釈に異論を唱えているかのように見える。このことからも、ジャヤンタ註全体を *PVA* に対する通常の複註であると断定してしまうのは早計かもしれない。とりわけ第2章・第3章に関しては、この註釈の性格を今後より詳細に検討する必要があろう。

(62) 彼の名をチベット人の音写 Dza mā ri に基づき Jamāri と還梵するのは正しくない。Yamāri であれば「ヤマ神の敵」の意で仏教徒に相応しいが、Jamāri では意味が取りにくい。中期インド語では多くの場合、y-が j-に変化することに留意されたい。またターラナータの『インド仏教史』で彼の名が Yamāri と音写されている点も見逃せない (cf. *Tāranāthae de Doctrinae Buddhicae in India Propagatione*, Ed. A. Schiefner, St. Petersburg 1868: 187)。

(63) Vasubandhu = Dbyig gnyen: Y(Me)250b4 etc.; Nyāyamukhaṭīkākāra = Rigs pa'i sgo'i ṭī kā byed pa: Y(Tse)45b7; Pramāṇasamuccayaṭīkākāra = Tshad ma kun las btus pa'i bshad pa byed pa: Y(The)63a7 etc.; Devendrabuddhi = Lha dbang blo: Y(Tse)128a2 etc.; ='Grel pa mkhan (*Vṛttipaṇḍita): Y(The)88b6; Śākyabuddhi = Śākya blo: Y(Me)153a1; Arcaṭa = A rtsa ṭa: Y(Phe)319a3 etc.; Śāntarakṣita = Zhi ba 'tsho: Y(Be)56b6; Kamalaśīla: Y(Phe)212b7; Ravigupta = Nyi ma sbas pa: Y(Phe)232b7.

(64) Patañjali = Pa tan jal: Y(Phe)226a5; 237b1; Bhāravi ='Ba' ra bi: Y(Phe)229b1; Bhartṛhari = Bhar ti ha ri: Y(Tse)202a3; Uddyotakara = gSal byed: Y(Tse)56a5: 285b5; 317a2, 4; Śaṅkara[svāmin] = bDe byed: Y(Me)173b1; Trilocana = Tri lo tsa na: Y(Phe)276a3.

(65) Cf. Y(Phe)274a4: Rigs pa'i rgyan = *Nyāyabhūṣaṇa?* ジュニャーナシュリーミトラにバーサルヴァジュニャへの言及があることから見て、ヤマーリが彼の著書を引用していたとしても全く不思議ではない。

(66) アルチャタへの言及は、上述の箇所以外に少なくとも5箇所に見いだされる (cf. Y(Phe)332a1; Y(Me)20a1; 20b2; Y(Be)58b2; Y(Tse)54b6)。特に最後の箇所は、アルチャタの内遍充論に言及しているという意味で重要であると思われる。ダルモッタラに対する言及については、本稿1.2.1.を参照。

(67) シチェルバツキーのいわゆる文献学派・哲学学派・宗教学派の3分類の起源の一つがここにあるとみるのは行き過ぎであろうか。

(68) Cf. Kuijp 1983: 3.

(69) Cf. Y. Kajiyama, *An Introduction to Buddhist Philosophy. An Annotated Translation of the Tarkabhāṣā of Mokṣākaragupta*, Kyoto 1966: 7ff.

(70) Cf. Y(Be)56b4ff.; (Me)2b5ff. 特に後の箇所では、*Mahāyānasūtrālaṃkāra, Madhyāntavibhāga,*

Abhisamayālaṃkāra, *Uttaratantra* の各書が集中的に引用されている。

(71) ジュニャーナシュリーミトラがプラジュニャーカラの思想の後継者であることは、つとに沖和史氏の指摘するところであったが（cf. 沖和史「《citrādvaita》理論の展開―Prajñākaragupta の論述―」『東海仏教』第20輯、1975：81-94）、最近谷貞志氏も、ジュニャーナシュリーミトラの刹那滅論証が基本的にプラジュニャーカラの帰謬論証の学説に依存していることを明らかにした（cf. 谷貞志「ジュニャーナシュリーミトラ「瞬間的消滅論」―思想的クロノロジーの逆転―」『印度学仏教学研究』第44巻第1号、1995：353-357）。この意味では、ジュニャーナシュリーミトラとラトナキールティはダルマキールティの註釈者ではないが、系統的には、いわゆる宗教学派に分類され得る学者であると言えよう。

(72) Cf. Stcherbatsky 1932: 44f.

(73) Cf. DhPr: introduction: xxi. ジャヤンタが主張する上述の Pramāṇasiddhi が *PV* の第1章であるとする説が、ラヴィグプタの考えと異なるのは事実であるが、この説は基本的には文献学派のシャーキヤブッディの主張に対するものである。注(1)に示した拙稿を参照。

A Tradition of the Buddhist Logico-epistemological School

—Prajñākaragupta and His Followers—

Motoi ONO

The purpose of this paper is to elucidate some essential problems on "the religious school", a tradition of the Buddhist logico-epistemological school, the founder of which is Prajñākaragupta (=Prajñākara).

1) The author examines the life-time of Prajñākara. Yamāri, a commentator to the *Pramāṇavārttikālaṃkāra (=PVA)* by Prajñākara, often mentions Dharmottara in his commentary and claims that Prajñākara criticized Dharmottara at some places of the *PVA*. The validity of Yamāri's claim has been partly ascertained. Some scholars have already found that some theories which Prajñākara criticized belong to Dharmottara's work. The author produces further evidence that Prajñākara really criticized Dharmottara. In this paper it is shown that four other theories or interpretations which Prajñākara criticized can also be traced back to Dharmottara's work. In terms of this consideration, we can ascertain that Dharmottara's work was well known to Prajñākara. We can, therefore, regard the *terminus ante quem* of Prajñākara's life-time as the life-time of Dharmottara (ca. 740-800).

In regards to the *terminus post quem* of his life-time, we should take into consideration the fact that Jayanta Bhaṭṭa (ca. 840-900) mentions Ravigupta, Prajñākara's disciple. Moreover, the *PVA* is often cited by Vidyānanda, the author of the *Aṣṭasahasrī*, whose life-time is assumed to be about 775-840. Therefore, we can regard the *terminus post quem* of Prajñākara's life-time as the first half of the 9th. century. In consequence, we can assign Prajñākara to about 750-810 A.D.

2) The author examines the life-time of three followers of Prajñākara and roughly describes the characters of their commentaries.

Ravigupta's commentary is a commentary to the *Pramāṇavārttika*. This commentary, however, can be an important material for interpreting the *PVA* because most part of the commentary consists of contents of the *PVA*. Because Ravigupta is probably a direct pupil of Prajñakara, we can assume his life-period to be about 780-840 A.D.

The Tibetan name of the first commentator of the *PVA*, namely rGyal ba can, has hitherto been translated back to "Jina" in Sanskrit without sufficient reasons. rGyal ba can, however, must be translated back to "Jayanta" in Sanskrit, because Yamāri, the second commentator of the *PVA*, sometimes cites the interpretations of rGyal ba can's commentary in the name of "Dza yan ta". His commentary has some remarkable

characters. One of them is that he often uses his own name in order to emphasize his original interpretations. Another is that he cites many verses by Kumārila, including some verses of his lost *Bṛhaṭṭīkā*. Because he perhaps doesn't know Jñānaśrīmitra, he may have lived about the second half of 10th. century.

Yamāri's commentary is very useful for interpreting the difficult contents of the *PVA*. Furthermore, he refers to many Buddhist and Brahmanical scholars. His mention of the commentators of the Buddhist logico-epistemological school is a clue to elucidating the history of this school systematically. Because he probably knows Jñānaśrīmitra (ca. 980-1030 active) and his commentary was translated into Tibetan about 1100 A.D., he may have lived about 1000-1060 A.D.